

SCT-Bの反応パターンと集団ロールシャッハとの関係

小林 哲郎

1. はじめに

SCT-Bは精研式文章完成法を参考にして選んだ25の刺激語（家庭、身体、社会の3領域との関係を考慮した）を呈示して文章を書かせた後に、「が」という接続詞を用いて全体が1つの文章になる様に、もう1つ文章を書かせる課題である。SCT-Bは施行時間の問題上刺激語の数は制限されるが、「が」の前後での反応の変化にその個人のパーソナリティが反映されるものと思われる。

筆者は、このテストをいくつかの大学等で施行し、「が」の前後の変化にいくつかのパターンがあることを見出した。その反応パターンには以下のようなものがある。

1) 肯定・否定

前半で肯定（否定）的感情を述べ、後半で否定（肯定）的感情を述べるパターン。

2) 肯定・肯定

前半でも後半でも肯定的感情を述べるパターン。

3) 否定・否定

前半でも後半でも否定的感情を述べるパターン。

4) 例外

前半で肯定（否定）しておいて、例外的な否定（肯定）面を述べるパターン。このパターンにはいくつかのバリエーションがある。たとえば前半で肯定（否定）した事物や事象について部分的に否定（肯定）することもあるし、限定された状態になると問題が生じるというような表現もこのパターンである。

5) 受容

前半では否定的感情を述べるが、後半でそれを受容するパターン。

6) 拒絶

前半では受容したものの後半で否定的感情を述べるパターン。

7) 理想・現実

前半で理想、願望、原則などを述べ、後半では実際の状況、現実的問題などを述べるパターン。

8) 期待・不安

前半で期待、希望を述べ、後半ではそのことについての不安を述べるパターン。

9) 過去・現在

前半、後半で過去と現在の違いについて述べているもの。ただし英文法でいうような大過去と過去の関係の中で違いに言及しているものもこのパターンに入れる。

10) 希望

前半で述べた内容に関して後半で希望、願望を述べるパターン。

11) 不安

前半で述べた内容に関して後半で不安を表明するパターン。

12) 決意

前半で述べた内容に関して後半で決意や努力を表明したり原則、理想を述べるパターン。

13) 自己

前半で述べた内容に関して後半で自分に関係づける。

14) 説明

前半で述べた内容に関して後半で説明したり気持ちを述べたりするパターン。

15) その他

同じ文章の繰り返しや刺激語に手を加えたりしたもの

後半に反応がないものと疑問反応（意味の分からないもの、「が」を格助詞として使っているもの）を除いて、以上のどれかに評定する。

この反応パターンの評定に関しては、小林哲郎（1985、1986、1985〈学会発表〉）に詳しく解説した。

このSCT-Bの反応パターンの特徴として興味深いことは、控え目で引っ込み思案な人が他者に依存する「希望」のパターンが多かったり、抑圧的な人が「不安」のパターンが多いというように普段は行動に表わさない欲求や心理を反応パターンに示していることである。これは、質問紙で測られるような意識的な特徴よりも、その個人のより無意識的な特徴を捉えているためではないかと思われる。即ち、一度完成した文章に「が」をつけてもう一つ文章を作るという検査場面が、その刺激語に関するコンプレックスを刺激して（直接的な無意識の内容ではないにしろ）被検者の意識していない欲求とか無意識的な反応様式を引き出すのではないかと考えられる。各刺激語に対する反応内容や反応パターンを総合的に考察することによって、このテストは個人のパーソナリティをダイナミックにとらえる心理検査となると思われるのである。

2. 目的

本研究は、SCT-Bの反応パターンの性質をより明らかにするために、集団ロールシャッハとの関連について日本心理学会発表データ(1988)に再検討を加えることとする⁽¹⁾。

3. 方法

金沢美術工芸大学学生77名と金沢大学医学部付属医療技術短大学生47名、計114名（男子38、女子76、平均年齢19.2歳）にSCT-Bと集団ロールシャッハ⁽²⁾（新版人格診断検査 本明寛著 金子書房）を施行した。

SCT-Bの反応パターンをパーセント得点にして角変換した後、集団ロールシャッハの各尺度との相関を算出した。ここで、ロールシャッハの尺度の中には出現数が少なくピアソンの相関に適さないものもある。そこで、平均が1以下のものは、0と1以上に分けて対応する反応パターンの平均、標準偏差から点双列相関係数を算出した（表1の#のついた尺度）。#の付いてないものはピアソンの相関係数である。

4. 結果と考察

「肯定否定」はKF、Kと負の相関がある。高橋ら(1981)は「KFやKが抑うつ的で活気のない傾向と、浮遊性の不安を表すという点で、多くの研究は一致している。」と述べていることから考えて、このパターンを多用する人は漠然とした浮遊性の不安が少ないことが考えられる。このパターンはMMP I⁽³⁾ではD(抑うつ性尺度)との負相関があり、情緒的安定性と関係があるものと思われる。

「肯定肯定」はFm系統(Fm、mF、m)とFk系統(Fk、kf、k)との間に負相関がある。Fm系統は無生物運動反応であり、Klopper, *et al.* (1962)によると自己の人格への敵対的な力や、脅威の認知を示すと考えられる。また、Fk系統については、知性化によっておおい隠そうと努めている愛情欲求に関する不安の存在を示すといわれる。従って、このパターンを多用する人は自らの葛藤を感じていないが、愛情欲求に関する不安を持っているということになる。MMP IではL尺度(嘘構点)との正相関があり、Fm系統との負相関を考慮に入れると抑圧の機制を用いる人がこのパターンを多用する可能性が考えられる。

「例外」はFk系統と正相関がある。このパターンを多用する人は、愛情欲求に関する不安を知性化する傾向があることが考えられる。MMP IではMa(軽そう性)尺度と相関があり、Y-G⁽⁴⁾では劣等感と負相関があることから、このパターンは自信があって活動的な人で、愛情欲求に関する不安などは知性化して直接的に意識しないのかも知れない。

「受容」はKF・K、Key-（キーマイナス）と正相関があり、FKと負の傾向がある。FKは内省によって、自分の不安を冷静に理解し、洞察によって解消しようとする能力を示すといわれる。また、Key-は理論的に好ましくない反応や、非行少年や問題児によくみられる反応であるといわれる。そのように内省力が低く、浮遊性の不安が強い(KF・K)のために、このパターンを多用する人は、内省力や洞察力で不安を解消できず、抑うつ的で、活気がないとい

表1. SCTーBの反応パターンと集団ロールシツハ

	肯定否定	肯定肯定	否定否定	例外	受容	拒絶	理想現実	期待不安	過去現在	希望	不安	決意	自己	説明
Key-	-0.076	-0.121	0.026	0.157+	0.207*	0.047	-0.156+	-0.024	-0.040	0.042	-0.070	-0.084	0.005	0.011
P	0.164+	0.003	-0.091	0.013	0.001	-0.001	0.056	0.125	-0.158+	-0.030	0.007	-0.150	-0.140	0.045
M	-0.036	-0.079	-0.036	-0.134	0.018	0.102	0.075	0.093	0.052	-0.037	-0.024	-0.005	-0.050	0.042
FM	-0.112	0.101	0.027	-0.023	0.005	0.072	0.044	-0.033	0.016	-0.080	0.213*	-0.012	-0.050	-0.038
Fm, mF, m	0.137	-0.226*	-0.038	-0.015	-0.130	0.198*	0.043	0.047	-0.131	-0.107	-0.249**	0.041	-0.102	0.085
FK	-0.070	0.035	-0.019	0.080	-0.171+	-0.195*	0.113	-0.118	0.045	0.026	-0.211*	-0.094	0.156+	-0.003
KF, K	-0.187*	-0.081	-0.083	0.129	0.235**	-0.005	-0.074	-0.096	-0.043	-0.056	-0.040	0.197*	0.003	-0.011
FK, kF, k	0.052	-0.265**	-0.099	0.234*	0.058	0.092	0.036	-0.017	-0.006	0.089	-0.116	-0.003	-0.061	-0.086
F	-0.007	-0.025	0.031	0.004	-0.090	-0.133	-0.023	-0.004	0.004	0.053	0.101	0.112	0.057	0.062
FC	0.101	0.010	-0.152+	-0.048	0.117	-0.034	0.128	0.071	-0.198*	-0.077	-0.049	-0.102	-0.000	-0.113
CF	-0.076	0.040	-0.098	0.149	0.086	0.112	-0.125	0.005	-0.113	0.097	-0.045	-0.056	0.003	0.038
C	0.093	0.051	0.046	-0.145	0.078	-0.084	-0.137	0.067	0.053	-0.003	-0.083	0.135	-0.035	0.069
Csym	-0.061	0.065	-0.004	-0.049	-0.150	0.018	-0.034	-0.005	-0.017	0.193*	0.006	0.030	0.167+	0.096
Cdes	-0.020	-0.002	-0.001	0.109	0.081	-0.088	-0.156+	0.130	-0.089	-0.107	0.024	0.033	-0.037	0.036
Fc	0.050	0.068	-0.092	-0.035	-0.009	0.011	-0.055	-0.094	0.242**	0.115	-0.029	0.154+	-0.054	-0.102
cF, c	0.053	-0.175+	0.025	0.039	0.006	0.145	0.102	0.041	0.160	-0.055	-0.144	-0.145	-0.140	-0.000
FC', C'F, C'	0.097	0.136	0.057	-0.088	-0.001	-0.001	0.066	0.020	-0.003	-0.018	-0.179*	-0.071	0.074	-0.117
F. L.	-0.013	-0.018	0.004	-0.044	-0.046	0.113	0.180*	0.028	0.092	-0.098	0.041	0.072	-0.046	-0.189*
M. A.	-0.007	-0.029	0.033	-0.084	0.081	0.053	-0.031	0.063	-0.126	-0.021	0.052	-0.161+	0.036	0.090

+ P<0.10 * P<0.05 ** P<0.01

う傾向があり、問題を引き起こすのかも知れない。

「拒絶」はF m系統と正相関、F Kと負相関がある。このパターンを多用する人は葛藤は十分認識しているが、内省力、洞察力によって、その葛藤を十分に処理できずに苦しんでいることが考えられる。集団T A T⁽⁵⁾では攻撃反応と負相関があったが、このパターンを多用する人はひきこもって苦しむ傾向があるのかも知れない。

「理想現実」は形態水準の評定値が高い。形態水準は反応の正確さ、明細化の程度、結合性的的確さなどを評価するものであり、知的潜在力の優秀さと関係するといわれる。従って、このパターンを多用する人は知的に優れていることが考えられる。

「過去現在」はF Cと負相関、F cと正相関がある。高橋らは「F Cは情緒的態度が社会化されており、ことさら努力しなくても衝動性を抑制して、それを適切な形に変えて表現し、他人とのラポールを形成していく適応性を表している」また、「F cは他人と争わないために自己を抑えがちの人にみられ、目立たない行動をとり、不安が生じても他人と調和していく傾向を表している。」と述べている。従って、このパターンを多用する人は、他人との適切な情緒的交流はうまくないが、自己を抑えて、表面的に他人に合わせていこうとする傾向があるのかも知れない。このパターンはM M P IではH y（ヒステリー性尺度）、Y-GではT（思考的外向尺度）と負相関がある。Graham（1977）はH yの低い人の特徴として、興味の範囲が狭い、社会活動に余り参加しない、疑い深い等をあげている。また、Tとの関係から熟慮的、反省的な傾向もあり、人間関係を余り好まず、表面的な付き合いしかしない人であると考えられる。

「希望」はCsymと正相関がある。Csymは分裂病者の反応として出ることもあるが豊かな想像力と関係することもある。ここでは、反応から、過度の抽象能力を示しているものと思われる。M M P IではM aと負相関、Dと正の傾向があり、Y-GではI（劣等感尺度）と正相関があることから、活動性が低く抑うつ的な人

の過敏性がCsymとの相関に表れたのかも知れない。

「不安」はF Mと正相関、F m系統、F K、F C'系統と負相関がある。F Mが多い場合、それが行動化されるかどうかは別として、欲求充足への衝動の認知や欲求不満の状態にある可能性を示すといわれる。F C'系統については黒色は抑うつと関係があるという考えや、逆に白色は幸福感と関係があるといわれたりして解釈が難しい。そこで、F m系統、F Kとの関連で解釈すると、このパターンを多用する人は、衝動性があるのに内省力がなく、自分の葛藤にも気づいてないような状態を示唆しているものと思われる。葛藤を認知できない点については、M M P IでもLと正相関があり抑圧的傾向があるといえるだろう。

「決意」はK F・Kと正相関がある。このパターンを多用する人は、漠然とした不安を持ちやすいことが考えられる。このパターンはM M P IでもP t（精神衰弱性尺度）と正相関があり、不安が強く緊張していることを示していると考えられる。

「自己」はF K、Csymと正の傾向がある。象徴的な色彩の使用を豊かな想像力と関係すると考え、F Kを内省力と考えると、内的世界で豊かな想像力を用いる人かも知れないが、妄想を形成する可能性も考えられる。事実、このパターンはM M P IではP a（偏執性尺度）、P t（精神衰弱性尺度）と正相関があり、妄想を抱き易い傾向が示されている。

以上のように各反応パターン毎に考察するといままでのM M P I、Y-G、集団T A Tとの相関から得られた結果を裏付けるようなものが多くみられる。各反応パターンの性質が少しずつ明らかになってきたようである。今後は、実際の臨床データなどにより、より詳細な検討を重ねていく必要があるものと思われる。

註

- (1) 論文集ではピアソンの相関で計算してあるが、発表時に、本論文にあるように決定因によっては、点双列相関係数になおして考察も訂正した。また、学会発表では時間が短いので、決定因との相関だけを示して説明を加えた。
- (2) 冊子式になっており、原版ロールシャッハの刺激に類似した刺激が5つ印刷され、それぞれが何に見えるかを1刺激について4つずつ選択肢から選ぶ。全部で20個の反応になるが、それぞれは決定因とフォーム・レベルが予め決められており、それらを集計する。また、ポピュラー反応（多くの人が選ぶ反応）とKey-反応（非行傾向や問題行動をする人が多く示す反応）も決められており、それらの反応を選ぶと集計される仕組みになっている。

表1の中のF.L.はフォーム・レベル（形態水準）である。また、M.A.は簡易診断表として不適応を起こし易い指標が10項目あげられており（例えば、F.L.平均0.89以下、Pなし、FM5以上等）該当する項目の数を被検者の不適応指数として数えたものである。
- (3) 質問紙法性格検査。ミネソタ多面人格目録。
- (4) 質問紙法性格検査。矢田部・ギルフォード性格検査。
- (5) 冊子式で、印刷された絵についてどういふところかを強制的に選択させる形式のTAT（絵画統覚検査）。

参考文献

- Graham, J. R. 1977 田中訳 「MMP I—臨床解釈の実際」 三京房
- 片口安史 1987 「改訂 新・心理診断法」金子書房
- Klopfcr, B. & Davidson, H. H. 1964 河合訳「ロールシャッハ・テクニック入門」ダイヤモンド社
- 小林哲郎 1985 S C T-Bの評定について 金沢美術工芸大学学報 第29号 35-44
- 小林哲郎 1985 S C T-Bの評定について —評定者間の評定の一致率の検討— 日本心理学会第49回大会発表論文集 240
- 小林哲郎 1986 S C T-Bの評定について —項目別の反応パターンの検討— 金沢美術工芸大学学報 第30号 39-45
- 小林哲郎 1986 S C T-Bの反応パターンとY-G 日本心理学会第50回大会発表論文集 589
- 小林哲郎 1987 S C T-Bの反応パターンとMMP Iとの関係について 金沢美術工芸大学学報 第31号 39-45
- 小林哲郎 1987 S C T-B反応パターンと集団TAT 日本教育心理学会第29回総会発表論文集 956-957
- 小林哲郎 1988 S C T-B反応パターンと集団ロールシャッハ 日本心理学会第52回大会発表論文集 131
- 本明 寛 1959 「集団用 新訂人格診断検査の手引」 金子書房
- 高橋雅春・北村依子 1981 「ロールシャッハ診断法1」 サイエンス社
- 牛島義友・野村勝彦 1985 「集団TAT検査の手引」 金子書房

(昭和63年10月8日受理)